[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
　Energy  
  
、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ衆（しゅう）を治（おさ）むること寡（か）を治むるがごとくなるは、分数（ぶんすう）これなり。衆を闘（たたか）わしむること寡（か）を闘わしむるがごとくなるは、形名（けいめい）これなり。三軍の衆、必ず敵を受うけて敗（はい）なからしむるべきは、奇正（きせい）これなり。兵の加うるところ、碬（たん）をもって卵（たまご）に投（とう）ずるがごとくなるは、虚実（きょじつ）これなり。  
■分は八と刀からなり肉を切り分けること、fēnである。その区分に従うことで身分、天分、職分fènとなる。衆（多）を治めるには切り分け寡（少）とし、その身分、職分を定める。軍における部隊編成における単位区分。張預注に、「一人を獨と曰い、二人を比と曰い、三人を參と曰う。比と參で伍とし、五人を列とし、二列を火とし、五火を隊とし、二隊を官とし、二官を曲とし、二曲を部とし、二部を校とし、二校を裨とし、二裨を軍とす」とある。■数は、shùで数えること、天数や命数を指すこともある。shǔで責任を問うことになる。各々の区分（伍や隊や曲や部等々）の人数とその責務を定める。■形は开と彡からなり、开は井、枠であり外から規制する語義があり、形と刑にわかれた。説文には形は「象形なり」とあり、注に「易に曰く、天に在りては象を成し、地に在りては形を成す」とあるごとく、形は実によって成就される感覚がある。部隊を配置し布陣となるのであるが、それは将の構想を形にしたものである。多勢の兵員であるが、その区分にはそれを集約する旌旗があり、旌旗の数は寡。■名は、金文では、夕（肉）と𠙵から成り、子が生まれると家廟に告げ字（あざな）をつけ、一定期間を過ぎて命名の儀式を行い、名をつけ家族の一員とすること。名は実体であり、これを諱（いみな）とし、通常は字（あざな）を用いる。説文の頃には、原義から外れ「自ら命（なをいふ）なり。口により夕による。夕は冥。冥は相見えず、故に口を以て自ら名す」とある。ここでは、叫出、号令に関するもので、曹操は、「旌旗を形と曰い、金鼓を名と曰う」としている。陳皥は、「鼓を聞かば則ち進め、金を聞かば則ち止れ」と注している。金鼓を号令とし、口伝の患を避け、衆を一斉に戦わしむ。■奇はqíで、特殊、人が予測不可なこと、jīで奇数の奇。説文において、大と可から成るとされたが、これでは字義が説明できない。字統によれば、奇は𪥁（曲刀）と𠙵（祝詞を収めた器）からなり、可は木で𠙵を打ち成就を求むもの、奇は曲刀を以て行うので尋常ではないことという。■正を説文は一と止からなり、一を以て（止るべきところに）止るを正（正しいところに止る）とするが、すでに本来の字義からはずれていた。字統によれば、一は□で邑のこと、止はそれに向かって進撃し、邑を征服すること。正が多義化して征（行きて正す）や政（打ちて正す）とされ正が「ただしい」ことに限定されるが、原義は、強者が征服することという。曹操は「先に出でて合戰すを正とし、後に出ずを奇とす」、李筌は「敵に當るを正とし、傍に出ずを奇とす」とする。正は尋常に戦うもの、奇は予測不能に戦うもの、正は敵の実と戦い、奇は敵の虚を襲う。正と正では決着がつき難く、虚実を見分け、奇で虚を突けとする。それは石を卵に投げつけるが如し、さもなくば局面を打開できない。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　およそ戦いは、正（せい）をもって合（がっ）し、奇をもって勝つ。ゆえに善く奇を出いだす者は、窮（きわまり）なきこと天地のごとく、竭（つ）きざること江河（こうが）のごとし。終わりてまた始まるは、日月（じつげつ）これなり。死してまた生ずるは、四時（しじ）これなり。声（こえ）は五に過ぎざるも、五声の変は勝（あ）げて聴くべからざるなり。色（いろ）は五に過ぎざるも、五色（ごしき）の変は勝（あ）げて観（み）るべからざるなり。味（あじ）は五に過ぎざるも、五味（ごみ）の変は勝（あ）げて嘗（な）むべからざるなり。戦勢（せんせい）は奇正（きせい）に過ぎざるも、奇正の変は勝（あ）げて窮（きわ）むべからざるなり。奇正のあい生ずることは、循環の端（はし）なきがごとし。たれかよくこれを窮（きわ）めんや。  
■以正合、合とは合戦のこと。正は正規軍、正攻法、不可勝（敵に勝たせない）の正と釈が分かれる。■以奇勝、彼我の戦力が拮抗しておれば、正では決着がつかない。奇は遊軍、奇法（不備を撃つ、臨機応変、詐、分断）等釈が分かれる。■無窮如天地、不竭如江（長江）河（黄河）からすれば、相手の謀・形を越える謀・形を考え行う絶えざる（相手の先を読む）進化を想定していよう。奇正相生ともあり、一度用いた奇は、次ぎには正となり、更に奇を考案できねば、それはもはや奇ではない。奇にも絶えざる進化が求められる。■物や事は変転しその組み合わせは極まりない。夜のままはなく朝が来る、枯草が芽吹く、これを止めることはできない。五声は宮、商、角、徵、羽の音階であるがその作り出す旋律や和音の組み合わせすべてを聴くことはできない。五色は青、黃、赤、白、黑であるがその作り出す色合いすべてを見ることはできない。五味は酸、辛、鹹、甘、苦であるがその作り出す味をすべて味わうことはできない。■戦の勢は奇と正からなるが、奇は正となり更に奇が求められ、それは終わりなく続き極め尽くすことはできない。  
  
、、、、、、、、、、、　激（げき）水の疾（はや）くして石を漂（ただ）よわすに至るは、勢（せい）なり。鷙鳥（しちょう）の疾（はや）くして毀折（きせつ）に至るは、節（せつ）なり。このゆえに善（よ）く戦う者は、その勢（せい）は険（けん）にしてその節は短なり。勢（せい）は弩（ど）を彍（ひく）がごとく、節は機（き）を発するがごとし。  
■勢とは物事を押し流すスピード、節とは正確に捕捉するスピード。■疾は金文では大と矢からなり、腋下に矢を受け傷つくこと。爿（床几）と疾から病、矢の去ること甚だしく速いことから、急/速の義となる。急速で傷つける義となる。■漂は氵と票からなり、票の本字は䙳、初文は𤐫で「火が飛ぶなり」とあり、火にあおられ浮き上がるさまは熛となり、ここでは、火勢を連想せしめ、水にもまれ浮き上がるさまが漂、水勢を連想せしむ。■勢は埶と力からなり、埶は藝の初文で草木を植樹すること。力は農耕用の耜（すき）のこと。深く耕して植えることで、生成に勢のあることが原義。■節は周礼、小行人に「邦國を守る者は玉節を用ひ、都鄙を守る者は角節を用ふ。凡て邦國の使節、山國は虎節を用ひ、土國は人節を用ひ、澤國は龍節を用ひ——皆金なり。英蕩を以て之を輔す。門關には符節を用ひ、貨賄には璽節を用ひ、道路には旌節を用ふ——皆て期有りて以て節を反す。凡て天下に通達す者必ず節有り、以てこれを傳輔す。節無きは、幾有りても則ち達せず」とあり、符節のこと。物事の推移のなかの節目であり、ピタリと符合、合致することでもある。鷙鳥の移動する獲物への距離と到達速度の目測が合致していること。■勢は険で節が短とは、力を蓄えて一気に放つようなもの。■険は説文に、阻、難なりとあり、易、坎下、彖伝に、「天險升る可からず。地險は山川丘陵なり。王公險を設け、以て其の國を守る。險の時用大なるかな」とある。時用とは、元来は、常は用いず必要な時に用いる、後には、当世の為に用いることとなる。■短\*1は、矢と豆からなり、説文に、「長短する所は矢を以て正す」とある。矢は孤弦の半径、長短を矢で測った。其直如矢の矢は正直なこと、矢其文德の矢は施すこと、夫子矢之曰の矢は誓うこと。豆は高坏であり、高坏の長さの矢のことか。ここでは、タイミングは瞬時と短いこと。■機は木と幾からなり、幾\*2は幺幺と戈からなり、糸飾りを戈につけ、邪悪を祓うことが原義、出入りを幾すとは検問すること。機は幡織りの機、仕掛け、からくりのある機となり、説文では、「發を主（つかさど）るを機と謂う」とあり、引き金を指し、發機は引き金を引くこと。■險を盾にして、自らの勢を温存し、相手を疲労させ、満を持して、一気に軍を発す。  
\*1\*2  
  
、、、、　紛紛紜紜（ふんぷんうんうん）として闘（たたかい）乱（みだ）れて、乱（みだ）すべからず。渾渾沌沌（こんこんとんとん）として形円（まる）くして、敗（やぶ）るべからず。  
■亂\*1,は𤔔と乙からなり、𤔔\*2は糸かせの上下に手を加えている形で、もつれた糸をあらわし、乙\*3は骨ベラなどの形でそれをほぐして解き治める意の字。元来は、𤔔が乱れることで亂は治ること（字統）。周の武王に亂臣ありの亂とは治の義である。説文では𤔔と亂の区別がなくなっており、治の字が用いられると、亂が「みだれる」義とされるようになった。戦闘では、戦う前は整然とした陣、戦闘になれば敵味方が入り乱れる、乱れた戦闘に陣形を治める方が勝つ。■圓\*4は員と□からなり、員の貝は鼎\*5の省略形で鼎には□形○形があり、円形である○を加えた○形鼎である。後に意味を明確にするために、更に外側に○を加えたが、漢字となると○形は□と表記され、員、圓となった。円形には首尾の区別がない。機に臨み、首となれば尾ともなる、攻となれば守ともなり、変に応じる。  
\*1\*2\*3\*4 \*5  
  
、、、、、　乱は治に生じ、怯（きょう）は勇に生じ、弱は彊（きょう）に生ず。治乱は数（すう）なり。勇怯（ゆうきょう）は勢（せい）なり。彊弱（きょうじゃく）は形（けい）なり。  
■コインに裏表がある。乱と治は数、怯と勇は勢、彊と弱は形の裏表の関係にある。分数は衆を寡として治むことを可能にした。戦闘において敵味方入り乱れて戦うも、形名たる旌旗と金鼓が機能しておれば治、無くば乱。落下する水勢の上（かみ）に居れば勇、下（しも）に居れば怯。形は円のごとく臨機応変するは彊、出来ぬは弱。■彊とは弓と畺からなり、畺は田の境界を区切ること、それと弓で何故「強」の義となったかは説文の頃には既に不明であり、彊の音は畺で意味は弓にあり、弓で勥迫するから勥としている（勥は迫なりとする）。強は弘と虫からなり、虫は蚕で、松脂を塗り込んだくすね糸を張った強靭な弓から強の義となったとされるようだ。弱の旧字は𢐅で弓と彡からなり、彡は飾りであり儀礼用の飾り弓、その彡のなびく様を嫋（じょう）々という。それを二つ並べたものが𢐅。説文では、「彡は毛氂（毛飾り）にして橈弱（たうじゃく）なるに象（かたど）る。弱なる物は并（あは）す」と説明している。彊は弓に畺あり、弱は弓に彡ありて并す、これと、勢如弩彍、節如発機から類推するに、弓に廣は勢有り、弓に畺は節有り、節なく彡并すを弱とみたのかもしれない。  
  
、、、、、、、　ゆえに善（よ）く敵を動かす者は、これに形（けい）すれば敵必ずこれに従い、これに予（あた）うれば、敵必ずこれを取る。利（り）をもってこれを動かし、卒（そつ）をもってこれを待（ま）つ。  
■動は金文では童と力からなり、童は上部が辛と目（入れ墨をした奴隷）、下部が東（槖「ふくろ」）と土で鐘（おもり）、力は耒（すき）で、奴隷に耕作させることが原義（働の初文）で、身を動かすこと。■予は杼（縦糸に横糸を通す器具）の初文で、爾雅、釈詁に、「賜ふなり」とあり、古くは賜・與（与）の義に用いられた。■卒は兵卒のこと。■敵に利を与える形を作る。亂、怯、弱の陣形を作り敵を誘い出し、或いは、食糧や牛馬を放置し略奪させ敵の陣形を分断、散乱させ、強力な伏兵を以て手薄となった所を攻める。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、　ゆえに善（よ）く戦う者は、これを勢（せい）に求めて、人に責（もと）めず。ゆえによく人を択（えら）びて勢（せい）に任（にん）ず。勢（せい）に任ずる者は、その人を戦わしむるや、木石（ぼくせき）を転ずるがごとし。木石（ぼくせき）の性（せい）は、安（あん）なればすなわち静（せい）に、危（き）なればすなわち動き、方（ほう）なればすなわち止（とど）まり、円（えん）なればすなわち行（ゆ）く。ゆえに善（よ）く人を戦わしむるの勢（いきお）い、円石（えんせき）を千仞（せんじん）の山に転ずるがごときは、勢（せい）なり。  
■求は説文の頃には求得の義となっており、その起源は分からなくなっていたようである。金文では求は「つぐなう贖」が原義で後に求得の義に用いられたとされる（字統）。■責zéは説文に「求むなり、貝により朿聲、引伸して誅責、責任」とあり𧵩が正字で賦貢の農作物のこと。また、責zhàiは、古（いにしえ）「債」に同じとする。「責は積の初文、農作物その他の物産を賦貢として献じること。その賦貢の責任を課すことを債という（字統）」。求之於勢　不責於人　勢に求め、人（個人の能力）に求めずと人（個人の責任）を責（せ）めずの両義があろう。■擇zéは扌と睪からなり、睪は獣屍が風雨に暴（さら）されてその形が殬解（とかい）してくずれている形。その采るべきところを択（えら）び扌（手に）とる。擇人の人は将軍として採るべき人、つまりは勢を分かっている人、を採ること。■戦人の人は兵士のこと。兵士の性は木石と同じ。安であれば静、□であれば止、危であれば動、○であれば行。これに勢を与えるには○石を高所に挙げる。機をみて、一気に落とす。兵士を相手より有利な立場に置いて、ここぞという時に一気に押し出す。  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
  
〈勢〉篇  
  
曹操曰く、用兵は勢に任す。  
李筌曰く、陳（陣）すに形を以て成し、決すに建瓴之勢（高い所から水を落とす比喩）の如し、故に是篇を以て之（形篇）に次ぐ。  
王晳曰く、勢とは、勢を積みて變ずこと。善く戰うとは、能く勢に任せて勝を取り、力を勞せず。  
張預曰く、兵勢已に成り、然して後に勢に任せて勝を取る。故に〈形〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：凡治眾如治寡，分數是也。）  
曹操曰く、部曲を分とし、什伍を數とす。  
李筌曰く、善く兵を用うとは、將に一金を鳴らし、一旌を舉げ、而して三軍盡く應ず。號令既に定れば、寡の如し（多勢が少勢の如く統制されていること）。  
杜牧曰：分は分別なり。數は人數なり。言うは、部曲は伍を行い、皆其の人數の多少を分別し、各（おのおの）偏裨（副将）や長伍に任せ、昇降を訓練せば、皆これを責成（責任を果し完成）す、故に我が治む所は寡なり。韓信曰く、「多多益々善し（多ければ多いほど善い）」是なり。  
陳皥曰く、兵を聚むこと既に眾の若きは、即ち須べからく多を部伍とす。部伍の内、各小吏有りて以てこれを主とす。故に其の人數を分け、これをして決斷を訓齊（同じくする）せしめば、敵に遇い陳に臨みて、授くに方略（計略）を以てせば、則ち我が統べるは眾と雖も、これを治むこと益々寡（すくな）し（少数の指揮官を治めばその意は全軍に通ず）。  
孟氏曰く、分は隊伍なり。數は兵の大數なり。分と數の多少、（分に）制を置きて先ず（数を）定む。  
梅堯臣曰く、部伍は奇と正の分と數、各に統べる所り。  
王晳曰く、分數は部曲を謂う。偏裨に各部有り。其の人數を分與すは、師、旅、卒、兩の屬の若し。  
張預曰く、眾を統べること既に多くば、必ず先ず偏裨の任を分け、伍の數を定め行い、相い亂しせしめず。然る後に用う可し。故に兵を治む法は、一人を獨と曰い、二人を比と曰い、三人を參と曰う。比と參で伍とし、五人を列とし、二列を火とし、五火を隊とし、二隊を官とし、二官を曲とし、二曲を部とし、二部を校とし、二校を裨とし、二裨を軍とす。遞相（相互）に屬を統べ、各訓練を加えば、百萬の眾を治むと雖も、寡を治むが如し。  
  
（鬥眾如鬥寡，形名是也。）  
曹操曰く、旌旗を形と曰い、金鼓を名と曰う。  
杜牧曰く、旌旗鐘鼓は敵にも亦これ有り。我安んぞ得て獨り形名を為さん？眾を鬥わすこと寡を鬥わすが如くするなり。夫れ形は陳形なり。名は旌旗なり。戰法に曰く、「陳間に陳を容れ、足曳けば白刃」。故に大陳の中に、復小陳有りて各（おのおの）地を占めて分れ、皆陳形有り。旗は各方に依り色あり、或は、認（識）すに鳥獸を以てし、某將の某陳、自ら名號有り。形（陣形）と名（旌旗）已に定れば、志は勢孤（勢力孤単）を專らにし、人は自の為に戰い、敗れれば則ち自ら敗れ、勝てば則ち自ら勝つ。百萬の兵戰うは、一夫が戰うが如くす。此れ之を是とす。  
陳皥曰く、夫れ軍士既に眾、分けて布すこと必ず廣く、陳に臨みて敵に對し、遞（伝）すこと相い知らず。故に旌旗の形を設け、各（おのおの）にこれを認（し）らしむ。進退遲速も又相い聞かず。故に金鼓を設け以てこれを節（調節）す。これを令す所以を曰く、「鼓を聞かば則ち進め、金を聞かば則ち止れ」。曹説は是なり。  
梅堯臣曰く、形は旌旗を以てす。名は采章（軍服紋章）を以てす。指麾（指揮）に應ずこと速（すみやか）なれば、後先有ること無し。  
王晳曰く、曹公が曰う「旌旗を形と曰い、金鼓を名と曰う」を晳は「形は旌旗、金鼓の制度。名は各が有す其の名を號す」と謂う。  
張預曰く、『軍政』に曰く、「言、相い聞こえず、故に鼓鐸す。視、相い見えず、故に旌旗す」。今兵を用うに既に眾、相去りて必ず遠く、耳目の力では聞見せざる所。故に士卒をして旌旗の形を望ましめ、而して前却は金鼓の號を聽かしめて行止せば、則ち勇者も得て獨り進まず、怯者も得て獨り退かず。故に曰く、「此は眾を用う法なり」。  
  
（三軍之眾，可使必受敵而無敗者，奇正是也。）  
曹操曰く、先に出でて合戰すを正とし、後に出ずを奇とす。  
李筌曰く、敵に當るを正とし、傍に出ずを奇とす。將に三軍に奇兵無くば、未だ人と利を爭う可からず。漢の呉王濞、兵を擁して大梁に入る。呉將の田伯祿、呉王に説きて曰く、「兵を屯聚して西（に向かう）し、他に奇道無くば、以て功を立つこと難し。臣、願わくば五萬人を得て、別に江淮に循いて上り、淮南、長沙を收め、武關に入りて大王と會す。此れ亦一奇なり」。從わず。遂に周亞夫に敗れる所となる。此則ち正有りて奇無し。  
杜牧曰く、解は下文に在り。  
賈林曰く、敵に當るは正を以て陳す。勝を取るは奇兵を以てす。前後左右俱に能く相應ぜば、則ち常に勝ちて敗れず。  
梅堯臣曰く、動を奇とし、靜を正とす。靜は以てこれを待ち、動は以てこれに勝つ。  
王晳曰く、「必」は當に「畢」に作る、字誤れり。奇正は還（めぐ）りて相生ず、故に畢（ことごと）く敵を受けて敗れること無し。  
何氏曰く、兵の體は萬變し、紛紜混沌、正であらざること無く、奇であらざること無し。兵、義を以て舉るが若きは正なり。敵に臨みて變に合すは奇なり。我が正、敵をしてこれを視しむに奇とす。我が奇、敵をしてこれを視しむに正とす。正は亦奇とし、奇は亦正とす。大抵は兵を用うに皆て奇正有り。奇正無くして勝は、幸勝なり、浪戰（乱戦で最下策）なり。韓信が水（川）を背にして陳し、兵を以て山を循りて趙の幟を拔かせ、以て其の國を破るが如きは、則ち背水が正、循山が奇なり。（韓）信又兵を臨晉に盛り（集結）、而して木罌（木製のかめ）を以て夏陽より安邑を襲いて魏王豹を虜（とりこと）すは、則ち臨晉が正、夏陽が奇なり。是に由りて之を觀るに、敵を受けて敗れること無きは、奇正が謂なり。尉繚子曰く、「今、鏌邪（名剣）の利（鋭利な武力）、犀兕（犀兕の皮を甲或いは盾に用いる）の堅（堅守）を以て、三軍の眾に奇正とする所有れば、則ち天下其の戰に當ること莫し（戦いを挑む者なし）」。  
張預曰く、三軍眾と雖も、人人をして皆て敵を受けて敗れざらしむは、奇正に在るも、奇正の説は、諸家同じからず。尉繚子則ち曰く、「正兵は先を貴とし、奇兵は後を貴とす」。曹公則ち曰く、「先ず出でて合戰すを正とし、後に出ずを奇とす」。李衛公則ち曰く、「兵は以て前を向くを正とし、後に却くを奇とす」。此れ皆て正を以て正とし、奇を以て奇とす。曾て相變りて循環する義を説かず。唯唐の太宗曰く、「奇を以て正とし、敵に視しむを以て正とせば則ち吾は奇を以てこれを擊つ。正を以て奇とし、敵に視しむを以て奇とせば則ち吾は正を以てこれを擊つ」。混を一法とす、敵をして測ること莫からしむ、茲に最も詳し。  
  
（兵之所加，如以碬投卵者，虛實是也。）  
曹操曰く、至實を以て至虛を擊つ。  
李筌曰く、碬（砥石）は實、卵は虛、實を以て虛を擊つは其の勢易し。  
孟氏曰：碬は石なり。兵、訓練し整に至り（整備され）、部領（統率者）が分明に（はっきり）して、更に能く審らかに敵情を料（はか）り、委（つぶさ）に虛實を知るが若きは、後に兵を以て加えれば、實は碬石を以て卵に投ずに同じ。  
梅堯臣曰く、碬xiáは石なり、音は遐xiá。實を以て虛を擊つ、猶堅を以て脆を破るがごとし。  
王晳曰く、碬は治鐵？也。鍛、冶鐵也ではないか。  
何氏曰く、兵を用うに虛實の勢を識れば、則ち勝たざること無し。  
張預曰く、下篇に曰く、「善く戰う者は、人に致して人より致されず」。此れ虛實彼我の法なり。敵が來るを引致すは、則ち彼の勢は常に虛。往かず彼に赴くは、則ち我が勢は常に實。實を以て虛を擊つは、石を舉げて卵に投ぐが如く、其れこれを破ること必。夫れ軍を合わせ眾を聚め、先ず分數を定む。分數明らかなれば、然る後に形名を習う（練習する）。形名正しければ、然る後に奇正を分く。奇正審ひらかになれば、然る後に虛實見る可し。四事の次序（順序）の所以なり。  
  
（凡戰者，以正合，以奇勝。）  
曹操曰く、正は敵に當り、奇兵は傍より不備を擊つ。  
李筌曰く、戰は其の詐無くば、以て敵に勝つこと難し。  
杜佑曰く、正は敵に當り、奇は傍より不備を擊つ。正道を以て合戰し、奇變を以て勝を取る。  
梅堯臣曰く、正を用いて合戰し、奇を用いて敵に勝つ。  
何氏曰く、戰國に廉頗が趙將と為るが如し。秦は間（者）をして曰わしむ、「秦は獨り趙括を畏れるのみ。廉頗は與み易し、且降らむ」。會て頗の軍は多く亡失し、數（たびたび）敗れ、壁を堅くして戰わず。又秦の反間の言を聞き、括をして頗に代らしむ。至りて則ち出軍し秦を擊つ。秦軍は佯敗（負けたふりを）して走（に）げ、二奇兵を張りて以て劫（おびやか）す。趙軍逐に勝ち、追いて秦壁に造（いた）るも壁堅くして拒み入るを得ず。而るに秦が奇兵二萬五千、趙軍の後を絕ち、又五千騎、趙と壁の間を絕つ。趙兵分かれて二と為り、糧道は絕たれ、括は卒敗（あれよあれよと全滅）す。又、隋突厥を塞ぐに、煬帝は令して唐高祖と馬邑太守王仁恭をして眾を率い邊を備しむ。會て虜（野蛮人）馬邑を寇す。仁恭眾寡にして敵せざるを以て懼色有り。高祖曰く、「今主上は遐（はるか）遠く、孤城にして絕援、若し、死戰せずば以て全を圖（はか）ること難し」。是に親ら精騎四千を選び、出でて遊軍と為す。居處飲食、水草に隨い逐うこと、突厥に一同す。虜を見れば候騎（斥候）し、但に馳騁し（馬を駆り）獵すのみで、これを輕ずが若し。虜と相い遇うに及びて、則ち犄角に陳を置き（鋭利な二軍に分かち）、善射者を選びて別隊と為し、滿を持して以てこれを待つ。虜は能く測ること莫（な）く敢へて決戰せず。因りて奇兵により擊走す。其の特勒（突厥の官名）駿馬に乘る所を獲て、斬首すること千餘級。又太宗は精鋭千餘騎を選び奇兵と為し、皆て黑衣玄甲（黒鎧）、分けて左右の隊と為し、大旗を建て、令して騎將秦叔寶、程咬金等をして分統せしむ。寇に臨む每に、太宗は躬に玄甲を被（お）びて、先鋒としてこれを率い、機を候（うかが）いて進み、向う所摧殄（折断）し、常に少を以て眾を擊ち、賊徒は氣懾（気後れ）す。又五代漢の高祖（劉知遠）は晉陽に在りて、郭進往きてこれに依る。漢祖、其の材を壯とす。會て北虜安陽城を屠（ほふ）る、因りて（郭進を）遣わし進攻してこれを拔き、戎人（えびすども）遁去（にげさ）り、坊州刺史を授く。虜主（契丹に捕らえられた出帝）道に斃（たお）れ、高祖は奇兵を井陘に出し、（郭進は）進むに間道を以てし先に洛北に入り、因りて河北を定む。此皆て奇を以て勝たる迹なり。  
張預曰く、兩軍相臨み、先ず正兵を以てこれと合戰す。徐（おもむろ）に奇兵を發し、或は其の旁を擣（う）ち、或は其の後を擊ち以てこれに勝つ。鄭伯が燕師を禦ぐが若きは、三軍を以て其の前に軍し、潛軍を以て其の後に軍す、是なり。  
  
（故善出奇者，無窮如天地，）  
李筌曰く、動靜なり。  
  
（不竭如江河。）  
李筌曰く、通流して絕えず。  
杜佑曰く、言うは、應變に奇を出し窮竭すること無し。  
張預曰く、言うは、應變に奇を出し、窮竭有ること無し。  
  
（終而復始，日月是也。死而復生，四時是也。）  
李筌曰く、奇變ずは日月四時（四季）の如し、虧盈（欠満）寒暑は停らず。  
杜佑曰く、日月は運（めぐ）り行き、入りては復（また）出ず。四時は王を更（あらた）め、興りて復（また）廢（すた）る。言うは、奇正が變化す、或は日月が進退し、四時が盛衰するが若きなり。  
張預曰く、日月は運（めぐ）り行き、入りては復（また）出ず。四時は王を更（あらた）め、興りて復（また）廢（すた）る。奇正相變じ、紛紜渾沌として、終始窮り無きを喻うなり。  
  
（聲不過五，）  
李筌曰く、宮、商、角、徵、羽なり。  
  
（五聲之變，不可勝聽也。）  
李筌曰く、變八音に入らば、奏樂の曲、聽き盡す可らず。  
  
（色不過五，）  
李筌曰く、青、黃、赤、白、黑なり。  
  
（五色之變，不可勝觀也。味不過五，）  
李筌曰く、酸、辛、鹹、甘、苦なり。  
  
（五味之變，不可勝嘗也。）  
曹操曰く、「無窮如天地」より已下は、皆て以て奇正の窮り無きを喻う。  
李筌曰く、五味の變とは、庖宰（料理長）の鼎（かなえ）の飪（煮炊きする烹饪料理の味「の変化」）なり。  
杜牧曰く、「無窮如天地」より已下は、皆て八陳奇正の喻なり。  
張預曰く、五聲、五色、五味の變を引きて、以て奇正の相生じて窮り無きを喻う。  
  
（戰勢不過奇正，奇正之變，不可勝窮也。）  
李筌曰く、邀截（襲撃を阻止すること）掩襲（不意打ちすること）は萬途の勢、窮め盡す可からず。  
梅堯臣曰く、奇正の變、猶五聲、五色、五味の變のごとく、盡くること無し。  
王晳曰く、奇正は、用兵の鈐鍵（鎖と鍵；要諦）、勝を制す樞機（肝要）なり。敵に臨み變を運（めぐ）らし、（奇正の）循環は窮まらず、窮まれば則ち敗れる。  
孟氏曰く、『六韜』に云く、「奇正は無窮の源に發す」。  
張預曰く、戰陳の勢は、奇正の一事に止むのみ。其の變に及びて用うれば、則ち萬途千轍（万道千例）、烏（いずくんぞ）窮め盡す可し？  
  
（奇正相生，如循環之無端，孰能窮之？）  
李筌曰く、奇正は相依りて生ず、團圓（円形）を環（めぐ）るが如く、端倪（事の終始）窮む可からず。  
梅堯臣曰く、變動周旋（渡り合うこと）、極まらず。  
王晳曰く、敵は我を窮むこと能わず。  
何氏曰く、奇正生じて轉じて相い變を為せば、其の環を循歷すが如く、首尾を求めて窮むこと莫し。  
張預曰く、奇亦正と為り、正亦奇と為る。變化相い生じ、循環すること本末無きが若く、誰か能く詰（端）を窮めむ？  
  
（激水之疾，至於漂石者，勢也；）  
孟氏曰く、勢が峻なれば、則ち巨石重しと雖も、止むこと能わず。  
杜佑曰く、言うは、水の性は柔弱で、石の性は剛重。漂轉に至る大石を洿下（低地の水溜り）に投ぜば、皆て急疾（速）の流に由りて、激しく其の勢を得る。  
張預曰く、水の性は柔弱、險徑要路を激して疾（速）流せば、則ち其の勢は以て巨石を轉ず可し。  
  
（鷙鳥之疾，至於毀折者，節也。）  
曹操曰く、發起して敵を擊つ。  
李筌曰く、柔勢は以て剛を轉ず可し、況や兵に於てをや？彈射の飛鳥に中（あた）る所以は、疾（速）くして節制有るに善し。  
杜牧曰く、勢は高より下に注（そそ）ぎ、險疾の勢を得る。故に、能く石を漂す。節は、量遠近を節し則ちこれを搏つ、故に、能く物を毀折す。  
杜佑曰く、發起して敵を討つこと、鷹鸇（鷹の一種）が攫搏す（爪で襲う）が如く、必ず能く禽獸を挫き折（かすめ取る）は、皆て伺候（様子を観ること）の明に由る。邀得屈折の節なり。王子曰く、「鷹隼の一擊は、百鳥以て其の勢を爭うこと無し。猛虎の一奮は、萬獸以て其の威を爭うこと無し。」  
梅堯臣曰く、水は柔と雖も、勢が迅（速）ければ則ち石を漂わす。鷙（猛鳥）は微（かすか）と雖も、勁（様子）を節し則ち物を折る。  
王晳曰：鷙鳥の疾、亦勢なり。勢に由り然る後に搏擊の節有り。下に險を云要（云わんとす）、故に先ず漂石を取りて以て喻う。  
何氏曰く、水は能く石を動かす、高下の勢なり。鷙能く物を搏つ（爪で襲う）、能く其の遠近を節せばなり。  
張預曰く、鷹鸇の鳥雀を擒（とら）うは、必ず遠近を節し量る。伺候（様子を観ること）審ひらかにして後に擊つ、故、能く物を折る（かすめ取る）。尉繚子曰く、「吾が器を用うに便（習熟）し、吾が武勇を養い、これを發（おこ）すに鳥が擊つが如くす」。李靖曰く、「鷙鳥將に擊たむとし、卑く飛び翼を斂（収）む（たたむ）」。皆て、これを待ちて後に發すを言う。  
  
（是故善戰者，其勢險，）  
曹操、李筌曰く、險は猶疾のごとし。  
杜牧曰く、險は戰爭の勢を言う、發（おこ）れば則ち人を殺す、故に、下文に彍弩（急疾・危険）の如くに喻う。  
王晳曰：險とは、折すこと其の疾を致すを以てす（一瞬に打ち砕く）。水が險隘を得て勢を成すが如し。  
  
（其節短。）  
曹操、李筌曰く、短は近なり。  
杜牧曰く、言うは、近を以て節とす。鷙鳥の發すが如きは、近して則ちこれを搏つ、力は全、志は專（全力で集中）せば、則ち必ず獲る。  
杜佑曰く、短は近なり。節は斷なり。短近とは、能く危に因りて勝を取る、卒（にわか）を以て近を擊つを言う（危険を冒して近づき不意に襲う）。  
梅堯臣曰く、險せば則ち迅、短せば則ち勁。故に戰の勢、當に險疾して短近のごとし。  
王晳曰く、鷙の能く搏つは、發せば必ず中（あた）る。勢來るは遠にして搏つ所の節は至短なり。兵の機に乘ずこと、當に是の如きのみ。曹公曰く、「短とは近なり」。  
孟氏は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、險は疾、短は近なり。言うは、善く戰うとは先ず地の遠近、形の廣狹を度り、然る後に陳を立て、部伍の行列をして相去ること遠からずせしめ（間隔を整え）、其れ進擊せば、則ち五十步を以て節と為し、遠（近）を過（あやま）つ可らず。故に、勢迅（と）せば則ち禦ぎ難し、節（50歩に）近せば則ち易く勝つ。  
  
（勢如彍弩，節如發機。）  
曹操曰く、度在りて遠からずば、發せば則ち中（あた）る。  
李筌曰く、弩疾（と）からずんば（張りが弱くスピードがでない）則ち遠からず、矢近からずんば則ち中らず。勢は疾を尚び、節は速を務とす。\*疾は矢傷を受けることから病む、急疾するから、すみやかなこと。速には、束ねて行く、束薪は神事、束矢は獄訟に速（まね）かれる時で「まねく」義がある。勢には怒涛の疾の被害、節には（力をため込んで）一気、一斉で、分散、遅滞させないことが想定されている。  
杜牧曰く、彍は張なり。弩已に張さるが如きは、發（はな）てば則ち人を殺す。故に上文に「其の勢は險」と云う。機は固より須べからく近を以てこれを節し量るべし、然る後に必ず能く中る。故に上文に「其の節は短」と云う。短は乃ち近なり。此の言うは、戰陳、遠く敵人を逐う可からず。恐るらくは隊伍離散し斷絕すこと有り、反りて敵の乘ず所と為る。故に、「牧野誓」に曰く、「六步七步，四伐五伐」。是以て近し。\*「今日の事、六步七步に愆ぎずして、乃ち止まり齊えよ。夫子勖めよや。 四伐五伐六伐七伐に愆ぎずして、乃ち止まり齊えよ」。  
陳皥曰く、弩の機を發すや、近ければ則ち易く中る。戰で敵に遇うは、疾ければ則ち易く捷（素早くか）つ。趨馳、速からず、奮擊不近からざるが若きは、則ち敵に克ちて勝を全きすこと能わず。  
賈林曰く、戰の勢は、弩を張るが如し。兵の勢は、機（引き金）を發つが如し。  
梅堯臣曰く、彍guōの音は霍huò（現在では音と声が合わず）、彍張なり。弩を張るが如し、勢は逡巡せず。機を發すが如きは、節近くば易く中る。  
王晳曰く、戰勢が弩の張の如きは、待つこと有るが所以。其れ乘ず可き勢有るを待ち、其の機を發すが如し。  
何氏曰く、險は疾なり。短は近なり。此れ言うは、擊戰は形を得て、便に張弩發機の如く、勢は疾速にして、仍ち便近（相手に近づく）に利し、過差（不相応）に追擊を得ざるべし。故太公曰：「擊つに機を發すが如は、精微を破る所以なり」。  
張預曰く、弩を張るが如く、勢は緩む可からず。機を發つが如く、節は遠きこと可からず。言利に趨るは疾を尚とし。奮擊は近を貴とす。故に、太公曰く、「機を發すが如く擊つは、精微を破る所以なり」。  
  
（紛紛紜紜，鬥亂而不可亂也；渾渾沌沌，形圓而不可敗也。）  
曹操曰く、旌旗亂し敵に示すに亂るが若くし、金鼓を以てこれを齊（ととの）う。車騎轉じて圓を形すは、出入に道有りて齊整す。（齊は一斉で、揃うこと、整は整理で秩序や理のあること）  
李筌曰く、紛紜して鬬い、示すに亂る可くが如し。旌を建てば部有り、金を嗚らせば節有り。是を以て亂る可からず。渾沌とは合雜なり。形圓とは背を向くこと無し。敵に示すに敗れる可きは敗れる可からずとは、號令して齊整すなり。

|  |  |
| --- | --- |
| 杜牧曰く、此れ陳法を言う。『風後握奇文』に曰く、「四を正とし、四を奇とし、餘の奇を握とす。奇の音は機jī、或は、總じてこれを稱す。先ず游軍を出して兩端を定む」。此れ是のことなり。奇は零なり。陳數は九有り、中心に零有るは、大將はこれを（把）握して動かず、以て四面八陳を制して準則を取る（準拠する原則による）。其の人列は面と面とが相い向い、背と背と相い承（ふせ）ぐ。『周禮』蒐苗獮狩に、「（戦）車驟（はし）り徒（兵）趨（はし）り、表に及べば乃ち止る」。「進退は疾徐、疏密これを節す」。一は戰陳の如し。表は乃ち旗なり。旗は、蓋し民と（旗）下に期す。 | http://prometheusblog.net/wp-content/uploads/2017/05/4bed2e738bd4b31c2efac16f8ed6277f9f2ff824.jpg 八陣図と握奇陣：黄帝の時代に使用された神話時代の陣形たち：[HP](http://prometheusblog.net/2017/05/08/post-4199/) |

『握奇文』に曰く、「先ず游軍出でて兩端を定む」。蓋し游軍は本方旗を執りて、先ず地界を定め、然して後に軍士之に赴き、旗下に兵す。乃ち奇正を出し、變じて陳とす。『周禮』蒐苗獮狩に、「車驟徒趨，及表乃止」とは此れ則ち八陳遺制。『握奇』の文、此に止るのみ。其の餘の詞は、乃ち後の作者これに增加し、以て重ねて其の事難きのみ。夫れ五兵の利は、弧矢（こし、星座の弓矢）の利に如くは無く、以て天下を威すは、五兵同じく致す。天獨り弧矢星（弧矢は軍市の中の野鶏を襲う天狼を狙って牽制する、シリウス星座に該当）を看て、聖人獨り弧矢能く天下に威すと言い、他の兵を言はざるは何ぞ？蓋し戰法が弧矢に利すは、陳を得るに非ずんば其の利見（あら）われず。故に、黃帝が蚩尤に勝ち、以て中夏の車徒が夷虜騎士を制す、此れ乃ち弧矢の利なり。近代に在りて、以てこれを驗（しる）す可きは、晉の武（帝）の時、羌が涼州を陷れ、司馬の督馬隆が請いて勇士三千を募りてこれを平之ぐ。腰引弩三十六鈞(足腰で110kgfの力で引く弩手)、弓四鈞（27kgfの力で引く弓手）を募り、標を立て簡に試す。軍が西で溫水を渡ると、虜の樹機能（鮮卑の首領、禿髪樹機能）、眾萬を以て計りて隆を遏（さえぎ）る。隆は八陳法に依り、且つ戰い且つ前（すす）み、弓矢の及ぶ所、人皆弦に應じて倒れ、誅殺すること萬を（合）計し、涼州は遂に平らぐ。隋の時、突厥入寇し、楊素これを擊つ。先に是、諸將、虜と戰うに、虞胡の騎が奔突する每に、皆戎車（戦車）と徒步が相い參（まじ）り、鹿角（防御物）を舁（かつ）ぎて方陳を為し、騎を其の內に在（お）いた。素が至るや、悉く舊法を除き、諸軍に令して各（おのおの）步（兵）と騎（兵）と為した。突厥はこれを聞之き、手を額に加えて、仰天して曰く、「天、我に賜えり！」。大いに精騎十餘萬を率て至る。素は一戰し大いにこれを破る。此れ乃ち徒步を以て騎士を制す。若し陳法有ること非ずんば、開闔首尾之道を知りて、安んぞ能く勝に致るや？『曲禮』に曰く、「行くに朱雀を前（朱雀の旗を先軍）にし玄武を後にし、青龍を左とし白虎を右とし、招搖（北斗七星の旗）上に在り。其の怒を急繕す（行軍の士気を高くする）」。鄭司農に云く、「四獸を以て軍陳と為し、天を象（かたど）る」。孔疏に曰く、「此れ軍行を天文に象りて陳法と作（な）すを言う。但に、之が何如作すか知らざるのみ」。何徹に云く、「此の四獸を旌旗上に畫き、以て前後左右の陳を標（しる）す。『急繕其怒』とは、其の卒の勁利（堅固鋭利）威怒が天の怒の如きを言う。招搖は北斗の杓第七星なり、此を舉ぐれば則ち六星知る可し。陳を天文に象れば、即ち北斗なり」。復曰く、「進退に度有り」。鄭司農註に曰く、「度は伐と步との數を謂う」。孔疏に曰く、「『牧野誓』に云う『六步七步、四伐五伐（敵を攻むこと六歩七歩にして、敵を殺すは四、五人にして、隊列を整える）』の如き是なり」。復曰く、「左右に局（職能区分）有り」。鄭司農註に曰く、「局とは是步の分」。孔疏に曰く、「軍の左右に各（おおおの）部分有り、進めば則ち敵に就き、退けば則ち列に就き、相い差（たが）え濫（みだ）さずを言う」。下文に復曰く、「父の讎とは與に天を共に戴（いだ）かず（仇を伐て）。兄弟の讎とは兵を返さず（兵器を取りに帰らずとも仇を伐つことができるようにしておけ）；交遊の讎とは、國を同じうせず。四郊壘多きは（四方に讎を抱える状態）、此れ卿大夫の辱なり（以上は、礼記、曲礼上）」。此れ言うは、讎辱による戰爭に至りては、必勝在るを期し、固より陳法を知らざる可からず。其の文は故に相い次いで言うは、乃ち聖賢の深旨なり。『軍志』に曰く、「陳間に陳を容れば白刃に足曳し、隊間に隊を容れば與に敵對す可し。前に其の前を禦ぎ、後に其の後に當り、左に其の左を防ぎ、右に其の右を防ぐ。行けば必ず魚貫し、立てば必ず鴈行す。長くば以て短に參じ、短なれば以て長に參ず。軍を回し陳を轉ぜば、前を以て後と為し、後を以て前と為す。進むに奔逬（列を乱し突出すること）無く、退くに違走（列を乱し逃げること）無し。四頭八尾（八陣の戦闘隊形）では、（接）觸す處（尾）が首と為り、敵が其の中を衝けば、兩つの頭となって俱に救う」。此れ亦『曲禮』の說と同じ。數は五に起りて八に終る。今夔州の州前に、諸葛武侯、石を以て縱橫八行、布きて方陳を為る。奇正の出は皆て此に生ず。奇は亦正の正と為り、正は亦奇の奇と為る。彼は此れ相い用い、循環するに窮無し。諸葛、斜谷を出でて兵以て少し。但に能く正しく六の數を用い、今盩厔の司竹園に乃ち舊壘有り。司馬懿、十萬の步騎を以て、敢えて決戰せず。蓋し其の能を知れり。  
杜佑曰：旌旗亂るなり。敵に示すに亂るが若し。金鼓を以てこれを齊（ととの）う。紛紛は旌旗の像。紜紜は士卒の貌。言うは、旌旗翻し轉ず、一合し一離し、士卒は進み退き、或は往く或は來る。これを視れば散るが若く、これを擾（バタバタ振れば）せば亂るが若し。然るに其の法令素より定り、度職は分明にして、各に分數有れば、擾すれど亂れず。車騎は（一）齊に轉じ、圓を形すは、出入に道有り。齊は整なり。渾渾として車輪は轉行す。沌沌として步は驟し奔し馳せる。其の行陳を視れば、縱橫は圓にして方ならず。然而（されど）指趨（指図の意図）には、各（おのおの）應ず所有り。故に王子曰く、「將に內明にして外に暗、內治まりて外に混と欲（せ）むは、敵に之を示（み）せ己を輕んぜしむ所以のものなり」。  
梅堯臣曰く、分數已に定まり、形名已に立ち、離合散聚は亂るに似て亂ること能わず。形には首尾無く、應ずに前後無く、陽に旋し陰に轉じ、敗らむと欲せど敗ること能わず。  
王晳曰く、曹公曰ふ「施旗亂也、示敵若亂、以金鼓齊之矣」を晳が謂わば、紛紜は鬬亂（闘い乱れる）の貌なり。亂る可からずとは、節制が嚴明なるのみ。又曹公曰ふ「車騎轉而形圓者、出入有道、齊整也」を晳が謂わば、渾沌とは、形圓にして不測の貌なり。敗る可からずとは、隙缺する所無く、又不測の故なり。  
何氏曰く、此れ鬬（闘の）勢を言う。善き將兵とは、進退は紛紛として亂るに似る。然れども士馬は素より習（熟）しており、旌旗には節有りて、亂るに非ず。渾沌とは、形勢が離乍（なが）ら合乍、人以れ敗れると為すも、號令は素より明にして、離合に勢有りて、敗らる可きに非ず。形圓とは、行列無きなり。  
張預曰く、此れ八陳法なり。昔、黃帝始めて丘井の法に立ち、因りて以て兵を制す。故に、井に分け四道にして、八家これに處る。「井」字の形、開方九（九部分に分かれる）。五を陳法と為し、四を閑地と為す。所謂「數は五に起る」なり。虛は其の中、大將ここに居り、其の四面に環らせ、諸部が連り繞（まとわり囲む）す、所謂「八に終る」なり。變化に及ぶや敵を制す、則ち紛紜聚散し、鬬が亂れると雖も法は亂れず。渾沌交錯し、形が圓と雖も勢は散らず。所謂分けて八と成るは、復して一と為る。後世、武侯の方陳、李靖の六花、唐太宗の破陳樂舞、皆て其の遺制なり。  
  
（亂生於治，怯生於勇，弱生於彊。）  
曹操曰く、皆て形を毀（こぼ）ち情を匿（かく）す。  
李筌曰く、治之整を恃みて（整然たる秩序に依拠し）其の下を撫せずば、多く怨みて、其の亂れ必ず生ず。秦が天下を幷わせ（併合し）、銷兵（兵器の私有を禁じ）焚書し、以て列國を郡縣とし、秦は自ら始皇を稱し、關中に都し、以て萬代に至りこれを有（たも）たんとす。胡亥が矜驕す（たかぶりおごる）に至れば、陳勝、吳廣が弊に乘じて起り、所謂「亂は冶に生ず」なり。勇を以て人を陵（あなど）れば、敵に敗れる所と為る。秦王の苻堅は鼓行して晉を伐つは勇なり。其の敗れるに及ぶは、風聲鶴唳（風の音と鶴の鳴き声）を聞きて、以て晉軍と為す。是れ其の怯、所謂「怯は勇に生ず」なり。吳王夫差の兵は天下に敵無し、齊を黃池に陵（おか）し、越を會稽に陵す。是れ其の彊なり。越に敗れる所と為るは、城門を守らず、兵は王宮を圍み、夫差を殺して其の國を幷（あわ）す、所謂「弱は彊に生ず」なり。  
杜牧曰く、力を僞（いつわ）り形を亂し以て敵人を誘わんと欲（す）を言う。先ず須（す）べからく治に至り、然る後に能く僞りての亂為（す）。僞りて怯形を為し以て敵人を伺わんと欲（す）は、先ず須べからく勇に至り、然る後に能く僞りて怯為（す）。僞りて弱形を為し以て敵人を驕らさんと欲は、先ず須べからく彊に至り、然る後に能く偽りて弱為（す）。  
賈林曰く、治を恃めば則ち亂生ず。勇彊を恃めば則ち怯弱生ず。  
梅堯臣曰く、治ならば則ち能く偽りて亂を為す。勇なれば則ち能く偽りて怯を為す。彊なれば則ち能く偽りて弱を為す。  
王晳、梅堯臣の註と同じ。  
何氏曰：戰時に奇正の形勢を為し以て敵を破るを言う。我が兵は素より治り、我が士は素より勇にして、我が勢は素より彊。若し治、勇、強の勢を匿さずんば、何を以てか敵に致すや？須べからく、似の亂、似の怯、似の弱の形を張りて、以て敵人を誘うべし。彼が我が誘う狀に惑えば、これを必ず破らむ。  
張預曰く、能く敵に以て紛亂を示すは、必ずや己の治なり。能く敵に以て懦怯を示すは、必ずや己の勇なり。能く示敵に以て羸弱を示すは、必ずや己の強なり。皆て形を匿し以て敵人を誤らしむ。  
  
（治亂，數也；）  
曹操曰く、部分名數を以てこれを為す（部隊は旌旗によって分かれ、その名、人数、責務が定まっているから治亂が出来る）、故に亂る可からず。  
李筌曰く、歷數なり。百六の災、陰陽の數、人に由らざるか、時の會す所なり。  
杜牧曰く、言うは伍を行うに各分畫有り、部曲に皆て名數有り、故に能く治を為し、然る後に能く僞りて亂を為す。夫れ僞りて亂を為すとは、出入時ならず（時を違える）、樵採（薪の採集）は縱橫（ばらばらに行く）、刁斗（ちょうと；昼は飯炊きの器、夜は警戒を鳴らす銅鑼）は嚴ならず（食事も警戒も緩慢）、是なり。  
賈林曰く、治亂の分には、各（おのおの）度數有り。  
梅堯臣曰く、治を以て亂を為す、これに存するは分數。  
王晳曰く、治亂は數の變。數は法制を謂う。  
張預曰く、實（まこと）に治なれば僞りて以て亂を示す。其の部曲、行伍の數明らかなり。上文の所謂「眾を治むに寡を治むが如し。分數是なり」なり。  
  
（勇怯，勢也；）  
李筌曰く、夫れ兵は、其の勢を得れば則ち怯も勇、其の勢を失えば則ち勇も怯となる。兵法に定（つね）は無し、惟れ勢に因りて成る。  
杜牧曰く、勇を以て怯者と為すを言う。有利の勢を見て動かざるは、敵人以て我を實（まこと）の怯と為す。  
陳皥曰く、勇者は奮速なり。怯者は淹緩なり。敵人我が進むを欲し進まざるを見れば、即ち以て我を怯と為す。必ず輕易の心有り。我は其の懈惰に因りて、假勢以てこれを攻む。龍且は韓信を輕んじ、鄭人が我が師を誘うは是なり。  
孟氏が註は陳皥と同じ。  
梅堯臣曰く、勇を以て怯と為す。これを示せば以て取らず。  
王晳曰く、勇怯は勢の變。  
張預曰く、實に勇にして偽りて示すに怯を以てすは、其の勢に因る。魏將の龐涓は韓を攻む。齊將の田忌これを救う。孫臏、（田）忌に謂りて曰く、「彼の三晉の兵は、素より悍勇にして齊を輕んず。齊を號して怯と為す。善く戰うとは、其の勢に因りて利がこれを導く。齊軍をして、魏の地に入らば、日に減其の竈を減らしむべし」。涓これを聞きて、大いに喜びて曰く、「吾は素より齊の怯を知る」。乃ち日に倍して行を幷せて（倍の速度で）これを逐い、遂に馬陵に敗れる。  
  
（彊弱，形也。）  
曹操曰く、形勢宜しき所。  
杜牧曰く、彊を以て弱と為すには、須べからく其の形を示すべし。匈奴の冒頓が婁敬に示すに羸老（衰弱した老人）を以てす、是なり。  
陳皥曰く、楚王、中軍を毀ち以て隨人に張る。用は後圖を為す、此の類なり（楚王は随の使者に陣形を崩して見せ、攻撃させようとした、左伝、桓公六年春）。  
梅堯臣曰く、彊を以て弱と為すは、形すに羸懦（身体瘦弱，性格懦弱）を以てす。  
王晳曰く、彊弱とは形の變。  
何氏曰く、形勢を暫し變え、以て敵を誘い戰わしむは、怯に非ず、弱に非ず。亂を示し亂れざるは、隊伍本より整いたる。  
張預曰く、實に彊きは偽りて示すに弱を以てし、其の形を見（あらわ）す。漢の高祖、匈奴を擊たむと欲（し）、使を遣わし覘（偵察）せしむ。匈奴は其の壯士肥馬を匿し、其の弱兵羸畜を見しむ。使者十輩、皆て擊つ可しと言う。惟に婁敬曰く、「兩國相攻むに、宜しく長ず所を矜誇（驕矜誇大）すべし。今徒に老弱を見わすは、必ず奇兵有り。擊つ可からず」。帝は從わず、果して白登之圍有り（白登で包囲される）。  
  
（故善動敵者，形之，敵必從之；）  
曹操曰く、羸（よわる）形を見（あら）わす。  
李筌曰く、善く敵を誘うとは、軍（敵の軍）或いは彊くとも、能く其の敵を進退す。晉人が齊を伐つに、山澤の險を斥（うかが）い、至らざる所と雖も必ず旆し（旌旗を立て）疏（まばら）に陳し、輿に柴を曳きて從う。齊人は山に登りて晉師を望みて、旌旗と揚塵を見、其れ眾と謂いて夜に遁（にげ）る。則ち晉弱を齊は彊と為す。齊が魏を伐つに、將に田忌は孫臏の謀を用い。竈を減らして大粱に趨る。魏將の龐涓はこれを逐之いて曰く、「齊虜は何ぞ其れ怯す！吾が境に入りて、亡（に）ぐ者半なり」。馬陵に及びて、齊人が敗る所と為り、龐涓を殺し、魏太子を虜として旋（かえ）る。形弱を以て敵これに從うなり。  
杜牧曰く、羸弱（るいじゃく）に止るに非ず。言うは、我彊く敵弱ければ、則ち以て之（敵）に羸形を示し、之（羸形）に動じて來さしめる。我弱く敵彊ければ、則ち以て之に彊形を示し、之に動じて去らしむ。敵の動作は、皆て須べからく我に從わしむべし。孫臏曰く、「齊國を怯と號（よ）び、三晉はこれを輕んず。魏境に入れば十萬竈を為し、明日に五萬竈と為さしめよ」。魏の龐涓これを逐いて曰く、「齊虜何ぞ怯なるや！吾が境土に入れば、亡ぐ者は太半なり」。因りてこれを急追し、馬陵に至り、道狹くして、臏乃ち斫木書に曰く（木の表面を削り記す）、「龐涓、此の樹下にて死せり」。弩（兵）を側（かたわら）に伏せ、令して曰く、「火を見れば發（はな）て」。涓至りて燧（ひうち）を鑽（火をおこ）してこれを讀めば、萬弩、齊（一斉に）發たれ、龐涓は死す。此れ乃ち以て羸形を示し、能く龐涓を動かせ、遂に來りて我に從わせて殺せり。隋の煬帝は鴈門に於て、突厥の始畢可汗の圍む所と為る。太宗は應募し救援す。將軍雲定興を隸して營す。將に行かむとし、定興に謂りて曰く、「必ずや多く旗と鼓を齎（もたら）し、以て疑兵を設けよ。且（また）始畢可汗敢えて天子を圍めば、必ずや我が倉卒を以て援うこと無く、我は吾が軍容を張れ。令して數十里、晝は則ち旌旗相い續き、夜には則ち鉦鼓相い應ぜば、虜必ずや以て救兵雲集すと為し、塵を覩（み）て遁げよう。然らずんば、彼は眾にして我は寡、久しくすること能わず」。定興これに從う。師が崞縣に次ぐに、始畢遁げ去る。此れ乃ち我弱にして敵は彊、之に示すに彊を以てし、之に動じて去らしむ。故に、敵の來去は、一に皆て我の形に從わしむなり。  
梅堯臣曰く、形亂弱にして必ず從う。  
王晳曰く、敵を誘い必ず從わしむ。  
何氏曰く、形を移し勢を變じ、敵人を誘動す。敵戰に昧（くら）ければ、必ず我が計中に落ちて來る。力足りてこれを制す。  
張預曰：之を形すに羸弱を以てせば、敵必ず來りて從う。晉楚相い攻め、苗賁皇（びょうふんこう）が晉侯に謂りて曰く、「若し欒（欒書、武子、晋の中軍の将）と范（范燮、文子、中軍の佐）が行を易（か；強軍と弱軍を取替える、おろそか；軍律をゆるめる）え以てこれ（楚軍）を誘えば、中行（荀偃、上軍の佐）、二郤（郤錡、上軍の将・郤至、新軍の佐）必ず二穆（楚の子重･子辛、穆王の後）に克たむ」。果して楚師を敗る。又、楚が隨を伐つに、羸師以てこれを張る。季良曰く、「楚の羸、我を誘へり」。皆て此の二義なり。  
  
（予之，敵必取之；）  
曹操曰く、利を以て敵を誘えば、敵は其の壘を遠く離れる。便勢（手慣れた軍勢）を以て其の空虛孤特（孤立）を擊つ。  
杜牧曰く、曹公と袁紹とは官渡（地名）に相持す。曹公は河に循（したが）いて西（行）し、紹は是に渡河して公を追う。公は南阪に營し、下馬し鞍を解く。時に白馬（地名）では輜重を就道（そこから去ろうとする）、諸將は敵騎が多く、營に還るに如かずと以為（思）う。荀攸曰く、「此れ敵に餌とす所以、安くんぞこれを去る可きや？」。紹の將の文醜と劉備とは將に五六千騎、前後繼（つい）で至り、或は分れ輜重に趨（はし）る（輜重を分捕るため敵兵は分断され統率が乱れた）。公曰く、「可なり（行け）」。乃ち皆て上馬し、時に騎は六百人に滿たず。遂に大いにこれを破り、文醜を斬る。  
梅堯臣曰く、畏怯を示し而して必ず取る。  
王晳曰く、餌敵して必ず取る。「予」は「與」と同じ。  
張預曰く、これを小利を以て誘えば、敵は必ず來りて取る。吳は囚徒を以て越を誘い、楚は樵者を以て絞を誘うは是なり。  
  
（以利動之，以卒待之。）  
曹操曰く、利を以て敵を動かす。  
李筌曰く、後漢の大司馬の鄧禹の赤眉を攻む、赤眉は佯北（敗退を假裝す）し、輜重を棄てて遁る。車には皆て土を載せ、これを覆うに豆を以てす。禹軍は食に乏しく、競いてこれに趨り、行列を為さず。赤眉の伏兵奄（にわか）に至り、これを擊ち、禹は大敗す。則ち其の義なり。  
杜牧曰く、利を以て敵を動かす。敵既に我に從えば、則ち嚴兵以てこれを待つ。上文の解す所は是なり。  
梅堯臣曰く、以上の數事は、敵を動誘して我に從わせ、則ち精卒を以てこれを待つ。  
王晳曰く、或は之に從わしめ、或は之を取らしめ、必ず先に嚴兵以てこれを待つ。  
何氏曰く、敵の貪は我が利、則ち行列を失う。利既に能く動（はたら）く、則ち以て待つ所の卒これを擊てば、勝たざること無し。曹公西に馬超を征すが如きは、超と關を夾（はさ）みて軍を為す。公急ぎてこれを持（堅持）して潛（ひそか）に徐晃、朱靈等を遣し夜に蒲坂津を渡し、河（黄河）の西に據りて營せしむ。公は自ら潼關を北に渡らむとし、未だ濟（わた）らず。超は船を赴けて急ぎて戰う。公は牛馬を放ち以て餌賊とす。賊は亂れて牛馬を取り、公は渡るを得、河に循いて甬道（通道）と為して南（下）す。賊は退きて渭口に距（ふせ）ぐ。公乃ち多く疑兵を設け、潛に舟を以て兵を載せ渭に入り、浮橋と為し、夜に兵を分けて渭南に結營す。賊は夜に營を攻めるも、伏兵奮擊し、これを破る。十六國南涼の禿髮傉檀が姑臧を守り、後秦の姚興は將姚弼等を遣わし城下に至る。傉檀は牛羊を野に驅り、弼の眾採り掠（かす）む。傉檀は兵を分けて擊ち、大いにこれを破る。後魏の末、大將の廣陽王元は深く北狄を伐つに、于謹をして單騎にて賊中に入らしむ。示すに恩信を以てす。是に西部鐵勒の酋長乜列河等三萬餘戶並びて款（した、親）しくして附き、相い率いて南に遷る。廣陽は謹と折敷嶺に至りこれを迎へ接せむとす。謹が曰く、「破六汗拔陵の兵は眾く、少なからず。乜列河等が歸して附くを聞かば、必ず來りて邀擊す。彼若し先に險要に據れば、則ち與に鋒を爭うこと難し。今、乜列河等を以て餌とせば、當に競いて來りて抄掠（掠奪）せむ。然る後に伏（兵）を設けて待てば、必ず指掌（極めて容易く）これを破る」。廣陽は其の計を然りとし、拔陵は果して來りて邀擊し（十分に引きつけて迎撃する）、乜列河を嶺上に破り、部眾皆沒す。謹は伏兵を發して、賊は遂に大敗し、悉く乜列河の眾を收め得る。  
張預曰く、これを形にし既に從へば、これを予（あた）へ又取らす。是れ能く利を以てこれを動かして來らしむ。則ち勁卒（精兵）を以てこれを待つ。李靖は「卒」を以て「本」と為す。「本を以てこれを待つ」は、正兵で節制の師を謂う。  
  
（故善戰者，求之于勢，不責于人，）  
杜佑曰く、言うは、勝負の道は、自ら中に圖（はか）り、これを下に求め、師眾を責め怒り、彊（し）いて力進（強制的に前進）せしむことをせず。秦の穆（王）が過（あやまち）を悔いて、盂明（処罰した百里奚の息子）を替えざるが若くす。  
  
（故能擇人而任勢。）  
一に「故能擇人而任之」と作（な）す。諸家は「任勢」と作す者多し。  
曹操曰く、これを勢に求むとは、專ら權を任すなり。人に責めずとは、權變明らかなり。  
李筌曰く、勢を得て戰えば、人として怯者も能く勇たり。故に、能く其の能たる所を擇びてこれに任す。夫れ勇者は戰う可し、謹慎者は守る可し、智者は說くべし。物を棄つこと無きなり。  
杜牧曰く、言うは、善く戰うとは、先ず兵勢を料り、然る後に人の材を量り、短長に隨いて以てこれを任ず。不材の者に成るを責めず。曹公が漢中に張魯を征すに、張遼、李典、樂進、七千餘人に將して合淝を守る。護軍の薛悌に教えて與（あた）え、署函（密函）の邊（端）に曰く、「賊至れば乃ち發（ひら）け」。俄にして吳の孫權十萬人眾が合淝を圍む。乃ち共に發けば教えて曰く、「若し孫權至らば、張、李將の軍は出でて戰へ、樂將の軍は守れ、護軍は得て與に戰うこと勿れ」。諸將は皆て疑う。遼曰く、「公は征して外に在り、救至るに比（およ）ぶに、彼（孫権）必ずや我を破らむ。是れ以て教うは、其の未だ合せぬに及びて逆にこれを擊ち、其の威勢を折り、以て眾心を安んじ、然る後に守る可し。成敗の機は。此の一舉。に在り」。典と遼は同じく出でて、果して大いに孫權を破り、吳人の氣を奪い、還りて守備を修め、眾心乃ち安んず。權が城を攻めること、十日にして拔けず、乃ち退く。孫盛論じて曰く、「夫れ兵は詭道なり。合淝の守に至らば、懸は弱く無援。專ら勇者を任ぜば、則ち好戰して患を生ず。專ら怯者を任ぜば、則ち懼心にして保つこと難し。且（また）彼は眾にして我は寡。眾は必ず貪惰を懷（おも）う。我は以てこれを師に命ず。貪惰の卒を擊てと。其の勢で必ず勝ち、勝ちて後に守れば、則ち必ず固し。是れ以て魏武（曹操）は雜にして（雑多な能力の）武力を選び、參すに異同を以てし（攻撃方と守備方を分け）、この為（ため）に密かに教え、節すに其の用を宣（あきらか）にし、事至りて應ずこと、符契（攻撃と守備）を合わすが若（ごと）し」。  
賈林曰く、「擇人而任勢」を讀為せば（本義を注すならば）、言うは、示すに必勝の勢を以てし、人をしてこれに從わしめる。豈に更に外（ほか）に人に責め、其の勝敗を求むや？（必勝の「勢」以外に責めるものはない）勇怯の人を擇べば、進退の勢に任せよ。  
陳皥曰く、善く戰う者は專ら勢に求む。利を見れば速く進み、敵に先を為ささず。專ら機權に任せて、人に成るを責めず。苟も不獲已而（やむをえずして）人を用うは、即ち須べからく擇べばこれに任せよ。  
杜佑曰く、權變の明は、能く人（事）に簡置（簡略を旨とし）、己の形勢に任せよ。  
梅堯臣曰く、人を用うに勢を以てせば則ち易し。人を責むに力を以てせば則ち難し。能とは、當に在人を擇びて勢に任すべし。  
何氏曰く、勢を得ば自ら勝つ、專ら人を責むに力を以てせず。  
王晳曰く、謂うは、將が能く人を擇び勢に任せ以て戰えば、則ち自ら然り勝つ。人とは、偏裨（副将）を謂うか？  
張預曰く、人にす法とは、貪をして、愚をして、智をして、勇をして、各（おのおの）に自然の勢に任せ、人の不能とする所を責めず。故に、材の大小に隨い、擇びてこれに任す。尉繚子曰く、「其の長とする所に因りてこれを用う」。言うは、三軍の中、步者に長ず有り、騎者に長ず有り、能に因りて用いば、則ち人其の材を盡す。又、晉侯が類は能にしてこれを使うは、是なり。  
[孫子](https://gatchan.live/cache/view/army/1206925308)  
  
  
（任勢者，其戰人也，如轉木石；木石之性，安則靜，危則動，方則止，圓則行。）  
曹操曰く、自然の勢に任す。  
李筌曰く、勢に任せ眾を御す、當に此の如し。  
杜佑曰く、言うは、これを安地に投（入）せば則ち安んじ、これを危地に投（入）せば則ち危し。回避する所有るを知らず。勢に任すとは自から然り。方圓の形とは、猶兵の勝負の形のごとし。  
梅堯臣曰く、木石や重い物なり。易きは勢を以て動かすこと、難きは力を以て移すこと（重量物は勢いで動かすは容易であるが力で移すは難しい ）。三軍とは至りて眾なり。勢を以て戰う可し、力を以て使う可からず、自然の道なり。  
何氏は梅堯臣が註と同じ。  
張預曰く、木石が性は、これを安地に置けば則ち靜、これを危地に置けば則ち動。方正ならば則ち止り、圓斜ならば（傾けば）則ち行くは、自然の勢なり。三軍の眾、「甚だ陷れば則ち懼れず、往く所無くば則ち固り、不得已（やむを得ず）則ち鬬う」、亦自然の道。  
  
（故善戰人之勢，如轉圓石于千仞之山者，勢也。）  
李筌曰く、蒯通（蒯徹）は坂上走丸を以為（おも）う、其の易きを言う。（坂の上から弾丸を転がすこと）。  
杜牧曰く、千仞の山に石を轉がせば、止遏（とめさえぎる）可からずは、山に在りて石に在らず。人と戰いて百勝の勇有りて、彊弱に一貫するは、勢に在りて人に在らず。杜公元凱曰く、「昔、樂毅が濟西の一戰に藉（せき；踏みにじる）し、能く彊（強力な）齊を幷（併合）す。今、兵威は已に成り、竹を破るが如し、數節の後、刃を迎えて自ら解け、復（また）手を著（つ）けること無し、此の勢なり。勢、失う可からず」。乃ち東に建鄴に下り、終（つい）に吳を滅す。此の篇、大抵言うは、兵は勢に任すを貴び、險迅疾速を以て本と為す。故に、能く力を用うこと少くして功多きを得る。  
梅堯臣曰く、圓石山に在り、其の勢屹然とす。一人これを推せば、千人制すこと莫し。  
王晳曰く、石は自ら轉ずこと能わず。山の勢に因りて、遏（とど）む可からず。戰は妄りに勝つこと能わず、兵の勢に因りて支う可からず。  
張預曰く、石を山に轉（ころが）し、止め遏（とど）む可らずとは、勢に由りこれを使（なさ）しべばなり。兵險に在りて制禦す可からずとは、亦、勢これを使（なさ）しべばなり。李靖曰く、「兵に三勢有り。將が敵を輕ろんじ、士が戰を樂（よ）みし、志の勵むこと青雲、氣の等（くら）ぶこと飄風、これを氣勢と謂う。關山や狹路、羊腸や狗門では、一夫これを守れば、千人とて過（とおりす）ぎず、これを地勢と謂う。敵の怠慢に因り、勞役は飢渴し、前營は未だ舍せず、後軍は濟（わた）ること半ば、これを因勢と謂う。故に兵を用うは勢に任せること、峻坂に丸（石）を走（ころが）すが如くせば、力を用うこと至りて微（わずか）にして、功成ること甚だ博（大）なり」。  
  
了、2018.06.27 　修正　2020.11.12